

2008年3月13日

「科学と社会」全学教育プログラム準備作業委員会報告

「科学と社会」全学教育プログラム準備作業委員会

「科学と社会」全学プログラム準備作業委員会として議論を重ねた結果を、以下のよう
に報告を致します。

(理念と目的)

学問の専門分化が進み、自らの学問を大きな社会的コンテクストのなかで位置づける
力が弱くなっているように思われます。また、人間の営為としての学問であり、それは
当然社会との関連を抜きにしては語れません。本学として、文系・理系を問わず、高い
専門性に立った研究、隣接（あるいは学際）分野のリテラシーの獲得、社会に生きる学
問、という視点で人材養成を行うことを目標とすることが重要であります。特に、知の
体系のシステムを社会との関係性において位置づけ、社会的リーダーとしての自覚を持
った人間を養成することが求められており、研究者人格を形成するための教養教育とし
て「学問と社会」の関係を問い直す機会を提供することが必要であると考えます。

しかしながら現時点においては、人文科学・社会科学・自然科学のすべてを網羅して
総合的に学問と社会を共通教育として位置づける状況にはありません。そこで、総研大
の全学プログラムとして、視野の広い科学者を養成することを目指し、まず自然科学の
社会的位置づけを考える教育機会を設けることを提案します。社会における科学の受容
の条件、科学者の社会的責任、市民社会と歩む科学の位置づけなど、自然科学と社会に
関わる問題を常に意識しつつ研究活動に励む研究者を育成することを目的としていま
す。

(全学プログラムとしての目標)

- (1) 歴史的な視点を重視しつつ日本の自然科学の現状を外国と比較し、広く社会にお
ける科学知のありようを求めるプログラムであること。例えば、日本における自然
科学の占める社会的位置づけや特殊性、世界における自然科学のおかれた状況の比
較検討など、自然科学の文化的規定性や拘束性を明確にすること。
- (2) 科学研究者が持つべき倫理と知的探求の価値の位置づけという社会的背景を強く
認識させる科目とすること。
- (3) 自然科学と社会の関係を総合的に捉え直し、広い視野で科学や技術の現状を見つ
つ、科学者の持つべき社会的責任を考える機会とすること。
- (4) 全学共通の必修・選択科目、研究科・専攻独自の必修・選択科目を組み合わせた
構造とするよう全学で取り組むこと。

(提案)

- (1) 2008年度の措置について
先導科学研究科において開講している「科学・技術と社会」「生命科学と社会Ⅰ、
Ⅱ」「社会における科学リテラシーⅠ～Ⅵ」を全学共通科目として開放し、受講学
生への学習援助を行う。そのための事務体制を整備する。
- (2) 2009年度以降について

評議会の下に「科学と社会」全学プログラム委員会を設置して、以下について結論を得る。

(a) 5年一貫制の全学生に対して、科学倫理と知的探求の価値に関する講義を設定し、必修科目（最低1単位）とする。入学当初の受講が望ましいが、5年間のいずれにおいて受講することも可能とする。博士後期課程の学生も受講でき、卒業認定単位とできる。

(b) 入学式後の学生セミナーの期間を延長し、この科目を開講する可能性を追究する。

(注記) 2009年度より必修科目化することが望ましいが、科目内容、開講時期と講義の進め方、事務体制の整備などの議論を行い、関係研究科の合意を得、協力体制を構築するために2010年度以降からの実施となることもやむを得ない。その場合、上記(1)を継続する。

(今後の検討事項について)

「科学と社会」全学プログラム委員会は、以下について検討する。

(a) 「科学と社会」の授業群コースを設定して全学共通科目とすることを検討する。授業群内容、教員編成、履修方式、実施可能性、事務体制の整備などが検討項目となる。

(b) 希望する学生に対して副論文を課すことを検討する。副論文提出者に対して「科学と社会」コース修了の認定書を出す。ただし、副論文については、その内容・進め方・評価の基準等について教員間の合意が必要であり、慎重な検討が必要である。

(c) 研究科・専攻において「科学と社会」関連科目を設定し、他研究科・他専攻の学生も履修できるよう検討する。

(d) 遠隔授業（eラーニング）を利用した「科学と社会」関連科目のあり方を検討する。

(e) 「科学と社会」の問題を網羅した教科書を作成するため、その内容の検討とともに執筆者・完成時期など目標を明らかにして準備を開始する。

(注記) 葉山の支援体制などを検討するため、葉山教員からなるワーキング・グループを設置する。

(今後の全学的取り組みについて)

(a) 葉山高等研究センターに「科学と社会」研究班を設け、シンポジウムやワークショップを通じて、科学の基礎概念とその編成について研究、特に「諸科学の相互関連性と社会の変化のダイナミズム」などについての共同研究を組織する。同時に、「科学と社会」に関連する事例研究や企業との対話などを取り組み、具体的な題目について社会的意味や価値について考察を深めること。

(b) また全学プログラム委員会と研究班は協力して、文系も含めた全研究科が参加したワークショップを開催し、各研究科に関連した「科学と社会」の話題提供を求め、全学的な視野で議論を展開すること。

なお、次期中期目標・中期計画に「科学と社会」全学プログラムを重要項目として位置づけ、全学規模で取り組む体制を明らかにすることが必要である。